

新 生

待ち侘びた春です
水仙ほほ笑みぬ
小富士



東北新生園入所者自治会

平成二十八年 三月 十日印刷
平成二十八年 三月 二十日発行

新生第六十八巻 第一号

新 生

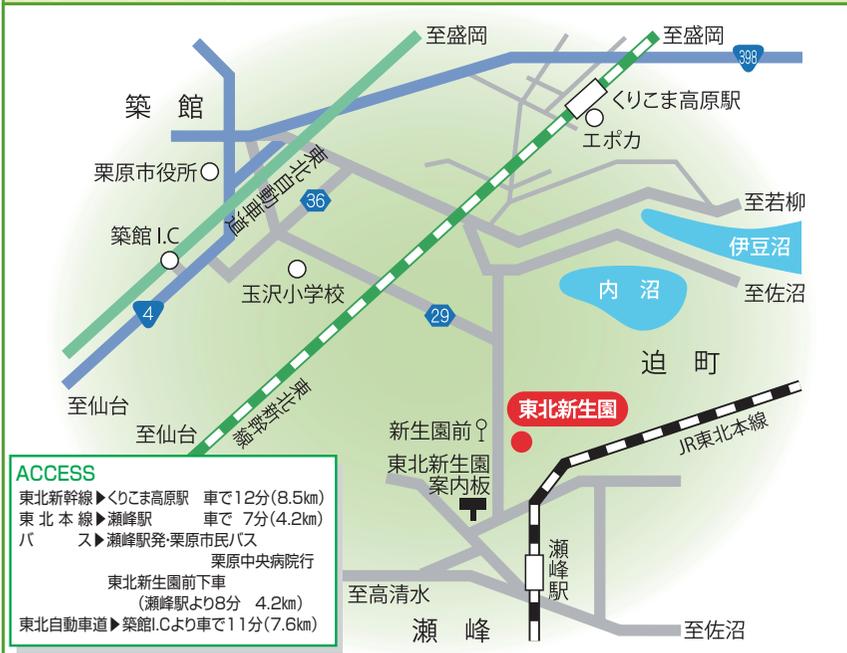
平成二十八年 三月 十日印刷
平成二十八年 三月 二十日発行

第六十八巻 第一号

東北新生園の概況

所在地	宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢1番地		
土地面積	351,291㎡		
建物延面積	25,280㎡		
開園	昭和14年10月27日		
医療法承認病床	244床		
標榜診療科	内科、外科、皮膚科、眼科、耳鼻いんこう科、歯科		
現在入所者数	男30名	女45名	計75名
職員定員数	153名(平成27年4月1日現在)		
園長	医学博士	横田	隆

東北新生園交通案内図



宮城ハンセン協会招待
SENDAI光のページェント見学バス旅行

— 平成27年12月9日 —



車窓からの
イルミネーション
(仙台市定禅寺通り)

仙台を一望できるレストラン
で食事をしました



舞踊:大泉智枝さん



歌手:ぶんやひろこさん

園内日誌

平成二十七年 十月〜十二月

《十月》

- 七〜八日 山形県里帰り旅行
- 二十三日 秋季バス旅行(仙台・定義山)
- 二十日 宮城県慰問
- 二十七日 秋田県羽後町慰問
- 二十七日 御歌碑公園整備落成式
- 二十八日 秋田県周辺地区福祉予防婦人会連合会慰問

《十一月》

- 一日 第十三回少年少女野球東北新生園大会
- 五日 第十四回パネル展
- 六日 第十四回パネル展・屋台まつり
- 十一日 秋田県赤十字芸能奉仕団慰問
- 十二日 新潟県藤楓協会慰問

《十二月》

- 一日 東北新生園イルミネーション点灯式
- 九日 SENDAI光のページェント見学バス旅行(宮城県ハンセン協会招待)
- 二十二日 岩手県慰問

平成二十七年十月〜十二月(敬称略)

【謝寄贈図書館】

青 松	香川 大島 青松 園
高 原	群馬 栗生 楽泉 園
甲田の裾	青森 松丘 保養 園
多 磨	東京 多磨 全生 園
菊池野	熊本 菊池 恵楓 園
愛 生	岡山 長島 愛生 園
楓	岡山 邑久 光明 園
大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り	
始良野	香川 大島 青松 園
点字愛生	岡山 星塚 敬愛 園
	岡山 長島 愛生園盲人会

平成28年3月10日 印刷
平成28年3月20日 発行

発行 東北新生園楓会(自治会)
編集 楓会文化部
印刷 川内印刷株式会社

〒989-4601

宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢一

発行所 東北新生園 電話 0228 (38) 2121(代)
東北新生園入所者自治会 電話 0228 (38) 3600



新生・第六十八巻第一号……………目次

表紙：「水仙」……………桃生 小富士

年頭によせて……………楓会会長 久保瑛二 (2)

行幸啓記念誌の発刊……………園 長 横田 隆 (4)

行幸啓記念誌の反響……………園 長 横田 隆 (6)

芥川賞作家・保坂和志君からの返信が……………園 長 横田 隆 (6)

ん研有明病院長山口俊晴先生の手紙……………園 長 横田 隆 (11)

退職にあたって……………診療放射線技師長 藤野 廣田 (17)

お世話になりました……………歯科技工士 藤野 廣田 (19)

短編集……………歯科技工士 藤野 廣田 (21)

|| 新生文芸 ||

詩……………選者 佐々木 洋一 (22)

短歌……………選者 山田 雅道 (26)

俳句……………選者 栗石 桃晃 (28)

川柳……………選者 渡邊 隆一 (29)

あしあとを振り返り……………看護師 相馬 京一 (31)

思い出……………看護師 相馬 京一 (35)

思いつき……………看護師 相馬 京一 (38)

振り返って……………看護師 相馬 京一 (40)

あの頃のパワーを……………看護師 相馬 京一 (41)

振り返って思う今……………看護師 相馬 京一 (42)

元介護員の立ち話……………看護師 相馬 京一 (44)

園内日誌・謝寄贈図書……………看護師 相馬 京一 (44)

年頭によせて

楓会会長 久保瑛 二

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

昨年は会員の皆様をはじめとし、職員の方々また地域、さらには各界皆様の温かいご指導とご支援をいただき、及ばずながら自治会業務を果たすことが出来ましたことをここに改めて厚く御礼申し上げますと共に、併せて本年も旧年同様、ご指導ご支援のほどお願い申し上げます。

特に今年は当自治会七十周年を迎える年でもあり、いささかその歴史の流れに感無量な思いとどう対応すべきかと、迎えた正月の中で戸惑っています。

いつも言うことですが、今やハンセン病療養所は、入所者の高齢化が進み、寝たきり老人、老人性痴呆症、成人病等による合併症が増加し、医療を中心とした高齢者対策が最も重要な課題になっています。

しかし、医療の現状は慢性的な医師の不足、さらには労務職員の不足等、これらの厳しい情勢の多岐に亘る課題が山積しております。どれを見ていっても国立の医療機関としての水準からは程遠いものと常々考えるところ です。

こうした思いで、現状を総括して見ると、私たちが要求している医療、福祉、生活面の一層の充実が疎か、様々な形での削減、減少がかけり、現状でのハンセン病療養所としての維持さえ困難になることが端的に予想されます。

そのためにも、二〇〇九年に施行された基本法にある、終生かつ良好な生活環境の確保とはなんなのか疑義すら覚えてならない。

あえて言わせてもらえるなら、終末期を迎えつつあるハンセン病療養所が国立医療機関としての機能を十分に発揮出来る良好な態勢づくりを、為政者の方々に責任ある施設づくりを、改めて国がしっかりと関わって下さることを願わずにはいられない。

実際問題としての将来構想は、将来のことではなく差し迫った現実の課題として余儀なく、終生を療養所にて送らなければならない者として、傷ついた心身をも支えてくれるよりよい環境と看護を求めて、本年は療友と共に組織をあげて実現のために活動を発展させられるよう努力していきたいと願っております。

年頭に当たり、まとまりのない一文ですがご挨拶といたします。

学卒業後、秋田大学から京都府立医大まで、直属の上司であり、現在、がん研有明病院の院長である山口俊晴先生からの手紙をご披露します。山口先生は私が研修医の時のオーベン(上司)であり、それ以後、公私ともにお世話になってきた先生です。

行幸啓記念誌の反響として、このお二人のことを思い出しながら、今回、「新生」誌に書いてみました。ご一読下されば幸いです。

園長 横田 隆



行幸啓記念誌の発刊

一昨年(2013)年の7月、天皇皇后両陛下は当園を訪問して下さいました。13あるハンセン療養所最後のご訪問でした。

それを記念して、昨年(2014)年の12月、甲斐事務長の編集により、「行幸啓記念誌」が発刊されました。入所者の皆さんには読んでいただきましたが、私のお世話になった先生方、先輩医師、同僚、知り合いなどにも送りました。

評判は良好で、「読んでいて涙した」という大学の同級生が二名、その他もおおむね好評だったと感じています。

その中で今回、お二人の方からのメール、手紙をご紹介します。

一人は幼稚園から高校卒業まで同級生であり、後年、芥川賞を受賞した作家の保坂和志君からのメール。私は高校生の時に、保坂に「作家などと言う、夢みたいな事は考えるな、絶対やめろ！」と助言し、それがいまだに私の心の傷になっています。芥川賞以外にも数々の賞を受賞しています。

もう一人は医師になってからの私の恩師。東北大

行幸啓記念誌の反響

芥川賞作家・保坂和志君からの返信

園長 横田 隆

横田さま

天皇皇后両陛下 行幸啓記念誌 お礼遅くなりました

ちよっとほかに 読まなければならぬ本があり、気持ちが悪く落ち着かないので、開いてすらいませんでした。すみません。

今夜、しばらく写真だけ眺めていたのですが、「御先導を仰せつかって」の冒頭を読むと、導入が見事なので、そのまま引き込まれ、

ぼくは途中で涙ぐんでしまいました。

何の涙なのか、自分でも分類不能な感じですが、天皇・園長・自治会長の三者による寸景に四十七年がすっかり濃密に描かれているのだと思いました。これから少しずつ読みます。

ぼくはとにかく、文学といわれる文章より、そのまま伝えたいという思いで書かれた文章がずっと好きです。

保坂和志

保坂和志君は幼稚園から高校を卒業するまで同期でした。彼は文系、私は理系だったため、高校三年の時はクラスは違いましたが、家が近いことがあり、親しくしていました。保坂の家は鎌倉の長谷観音の近くで、私は大仏のほぼ隣に住み、歩いて5分くらいの距離であることより、よく私の自宅に遊びに来ていました。保坂の自宅の隣に川端康成さんの屋敷があり、川端さんがノーベル文学賞を受賞した時に、小学生であった保坂少年は、報道陣でゴった返している川端さんの自宅に行き、「川端先生、ノーベル賞おめでとうございます」と祝辞を述べに行つたとのこと。川端先生はとても喜んでおられたようでした。その当時から活発で物怖じしない少年時代の工ピソードですが、川端康成さんも、まさかその少年が将来、芥川賞を受賞する作家になるとは思ひもなかったでしょう。

保坂が高校のある日、私に打ち明けたのでした。

「横田、俺さ、作家になろうと思うんだ」

「……」

「今も書いているんだけどさ、継続してずっと書いていけば、作家になれると思うんだ」

「保坂、一言、言つていい？ そんな夢みたいな事言わんと、地道にやれよ。作家つて、才能だよ、継続して書いても書いても駄目なのは駄目だろ。だって東大にうちの高校から毎年五十人合格しているよね、だけど作家に毎年何人なっている？ 一人もないじゃない。作家になるのは、才能だけで、極々選ばれた者だけが作家になれるんだろ」

「俺は書いていけば、なれると思う」

などと言う会話がなされました。その後、保坂は同人誌のようなものに、いくつか小説を書いていたようでした。

保坂のお母さんもこの状況を大変心配されたようで、うちに寄られた時に私に懇願されたものでした。

「横田君、うちの和志、夢みたいな事ばかり言って：小説とか言って、小学生の作文に毛の生えたようなものをいくつも書いていて。横田君から何とか言ってくれないかな」
「おばさん、大丈夫ですよ、この前、保坂にちゃんと言っておきましたから」

などと大人びた発言を保坂のお母上様に申し上げたことをよく覚えています。

その後、保坂は早稲田大学に行き、私は仙台の東北大学に行ったため、交流が途絶えました。

次に保坂を見かけたのが、芥川賞受賞のニュースでした。
何と、テレビの画面の中に、保坂が受賞者としてニコニコして、映っているではありませんか！

知っている人が両親も含めて、次々といなくなつて寂しくなつた昨今、保坂のお母さんにはいつまでもお元気でいてほしいと願っています。

保坂は本を出版するたびに、私に送ってくれています。今回、当園より行幸啓記念誌を発行したので、今度はこちらから送つたのです。作家になつた保坂に私の駄文を送るのは、気が引けたし、勇気のいることでした。その旨、保坂には伝え、送つたもので、返信の冒頭のメールをもらいました。保坂からの返事はうれしかったです。実は保坂がどのように読んでくれるか、一番気になつていたところでした。「文学といわれる文章より・・・」と言うところが、多少ひっかかりますが、それは仕方ないでしょう。

震災後に保坂は心配してくれて、メールをくれました。また中学・高校の同期に連絡してくれて、昔の同級生から救援物資を送つて

こんな驚いたことはありません。私が作家などやめると何度も助言し、母親が心配し、そんな中で、書き続けて作家になつたのです。私は喜びというか、複雑な気持ちで画面を眺めていました。私の不明を恥じなければならぬ、そんな気持ちが大半を占めていました。これをきっかけに、私は他人に将来のことで意見することはやめようと決心したものでした。

保坂のお母さんは、現在お元気で息子の活躍を喜んでおられるとのこと、風の噂で聞きました。だけど、一度、お会いして、あの頃のこと、私やお母さんご本人の思いなど、渋茶でも飲みながら、語り合いたいと思つています。幼稚園の頃からのことをすべて知られている、保坂のお母さんには頭が上がりないところが、保坂によるとお母さんも、「横田君は甥っ子みたいなものだから・・・」と下さつておられるとのこと、誠にありがたいことだと思つています。自分の幼い頃のことを

くれたりして、四十年ぶりに付き合いが再開したことなどあり、ありがたく思つたものでした。海産物を扱っている会社に勤めている者が鯨の缶詰を送ってくれて、これがまた懐かしい味で、震災後の物資が手に入らない時に胸に滲みる味でした。
その時の保坂のメールを載せましょう。

横田隆さま

混乱のときにメールするのを遠慮していましたが、とにかく、横田の無事を信じています。

いまは大変な激務に追われていると想像しています。

東京からは義援金を送ることぐらいしかできませんが、朝日新聞に、神戸で被災した精神科の中井久夫さんが、「被災者は忘れられることが一番つらい」と書いていました。可能な限り「忘れていない」というメッセージ

いろいろな形で書いていこうと思います。
からだに気をつけてください。

保坂和志

保坂はことあるたびに、震災関連のことを書いてくれていて、「被災者を忘れない」気持ちを持ち続けてくれています。

最後に、ウィキペディアに載っていた、保坂和志君の人物紹介をコピーして載せておきます。この文章の後半の記載通り、一筋縄ではいかない、シンプルとは真逆の人物であります。

保坂和志(ほさかかずし、1956年10月15日-)は、日本の小説家。1990年『ブレイクソング』でデビュー。1995年「この人の闘」で芥川賞受賞。「ストーリー」のない何気ない日常を描くことを得意とし、静かな生活の中に自己や世界への問いかけを平明に記していく内省的な作風。以後の主要な長編に『季節の

記憶』『カンバセーション・ピース』『未明の闘争』がある。評論やエッセイにおいては、小説を読んでいる時の時間の中にしかないもの、梗概よりも細部を重視すべきもの、思考の形式と定義し、巷間の小説に対する「文学的」な意識を批判している。『揺籃』、『コーリング』、『残響』、『私』という演算」などの中・短編作品を経て、創作においても批評性・実験性を強めた。



写真：高校時代
二列目向かって左端が保坂和志君
中央が筆者
一列目左が我が担任トツアマ
こと見山先生

行幸啓記念誌の反響 がん研有明病院長

山口 俊晴先生の手紙

園長 横田 隆

横田先生

拝復、十一月になると年末の喧騒が思い出され、なんとなく落ち着かなくなりまして。さて、このたびは重要なお役目を果たされたこと、心よりお祝い申し上げます。横田先生の一生の晴れ姿を、お送りいただいた記念誌からうかがい知ることが出来ました。実際は大変な事業だったと拝察します。家内は一言、「横田先生は少年らしくて素晴ら

しい」などと申しておりました。

横田先生の文章は相変わらず、読むものがぐいぐいひきつきます。緊張の中にユーモアが感じられ、楽しく読ませていただきました。得意のカラオケのところでは、「てんとう虫のサンバ」ではなく、「殿さまキングス」が出てきたので、意外でした。

がん研は名誉総裁が常陸宮様で、ご夫妻が節目節目の行事にはご臨席されます。華子妃殿下は気さくなお方で、ボランティア活動も実際に手を汚されるので感激します。

横田先生には会えそうでなかなか会えずにありますが、上京の機会がありましたら、是非ご一報ください。小生も院長になり、臨床をほぼ離れましたので、むしろ暇になりました。横田先生と焼き鳥で一杯やれる日を楽しみにしています。

がん研有明病院院長 山口 俊晴

昭和五十六年に東北大学を卒業した後、私は秋田県大曲市の総合病院外科で研修をすることになりました。その病院より仙台に赴任

三、四年上の先生が派遣されていて、一年目の何も出来ない私にとっては非常にお手本となるお師匠さんたちでした。その先生方の口によく上がる名前が「山口先生」ということで、その名前を呼ぶときは、声を落として、周囲に気を配るように、密かに言っていました。「山口先生がここにおられれば、これではすまない：」とか、「山口先生に知られればこれはちよっとね：」などと、私が当時尊敬していた上の先輩が明らかにおびえ口調で言うのですから、これは大変怖い先生なのだろうという気がしたものでした。

大曲での三年の研修が終わり、秋田大学第一外科に入局しました。それまでの期間、秋田大学から派遣されて来たドクター方とお世話になり、秋田大に行くのが普通のような人間関係になっていたためでした。大学での手術の助手を終えて、疲れて医局の

して帰って来た先輩医師の歓迎会に出席し、薦められたためでした。何でも外科の手術症例は滅法多く、それでいて医師の数は極端に少ない、だから手術症例が研修医に回ってくることが多い、非常に有意義な研修が出来るだろうという話を聞き、それなら・・・ということ、大曲へ行つたのでした。

赴任後に病院の屋上から周囲を見渡すと地平線まで田んぼが広がっていて、愕然としたことを覚えています。夜になり、もう一度屋上に上ると、赤提灯やら小さい飲み屋が病院を中心に同心円状に広がっており、嬉しくなったものでした。その当時、大曲は人口比率の飲み屋の数は全国で二位、大阪市に次ぐものでした。

その病院には三年間研修医として働きましたが、秋田大学第一外科より二人の医局員が交代で派遣されており、仕事でも遊びでも大変親しくなりました。赴任当初は、私よりも

ソファで寝ていると、三年上の先輩医師が小走りやってきて、「おいおい、明日、山口先生がアメリカから帰ってくるんだよ、厳しいよ！そんなぐたぐた寝ていられないよ！早く起きろや！」と言うのです。三年上と言えば、その頃、秋田大学の医局では中堅医師で、その出来る先生がそんなに狼狽えるのか：そんな猛者が来るのか：と、心は半分どきどき、半分わくわくという状態でした。

次の日の術前カンファランスに見知らぬ、長い白衣を着た医師が助教授と談笑しながら部屋に入ってきました。細身で、キビキビとした動きで、術前の症例検討では非常に鋭い指摘をし、検査が不十分であると主治医に指摘し、私の三、四年の先輩が直立不動で返答するというそれまでは見たことのない医局憧憬になっていました。その時から十年にわたり、私の直接の指導教官となった山口先生との出会いでした。

上の先生方が怯えるようなお方は、巨漢で、筋肉もモリモリ、山賊のようなヒゲでも生えていると思っていましたので、そのあたりを先輩医師に質すと、「山口先生はカミソリだよ：」とボソツと答えたものでした。確かにその鋭さは「カミソリ」と言うにふさわしく、誤解を恐れずに言えば、外科医にはそれほど頭のよい人はいないのですが、山口先生は本当に希有な存在でした。

私が所属していた秋田大学第一外科教授が京都府立医大に転勤したのに伴い、私も京都府立医大に転勤することになりました。山口先生は、京都府立医大のご出身なので、教授とともに京都に行かれ、その後、秋田から京都が舞台となったのです。

大学勤務では、週に一度は外の病院の勤務となります。山口先生と私は同じ、六地藏病院というところで、この地は明智光秀が羽柴秀吉との戦で敗れ、落ち延びていくところで

農民に討ち取られたところ、という説明を聞きました。さすがは京都で、あちらこちらに歴史を感じる箇所がありました。

出張病院で手術がある日は、山口先生が指導、私が助手を務め、終わると山口先生のご自宅に寄り、夕食をご馳走になる：というところが日課となっていました。ある日、山口先生より、「黒門市場に行こうか：」とのことで、市場で大きなフグを買ってきました。私はそれまでフグを食べたことがなかったのですが、山口先生の奥様が調理してくださるフグ、やや厚みのある刺身が最高に美味く、その後、フグ専門店で薄く、皿が透き通るような刺身を食しましたが、奥様の調理には全く及ばないと思つています。

京都府立医大で医学博士の学位を取得しましたが、山口先生の指導のおかげであり、論文の指導も懇切丁寧、非常にお世話になりました。大学医局での学会発表練習会では山口

先生は厳しく、妥協を許さない、そのような態度で医局員に接していました。「七枚目のスライド、下から三番目の数値が違っているぞ、直しておけよ」などと、余人が気づかないような所まで指摘されていました。大学での学会発表の予行演習があまりに厳しいので、本番の学会では、座長の先生も優しく、会場の質問者も教室員には好意的：と思われる、京都府立出身の発表者は非常にリラックスして受け答えしていると評判になったものでした。

国際学会に行く事が出来たのも、山口先生のおかげで、何度か外国で研究発表をする機会に恵まれました。ハンガリーの国際癌学会に行ったのも、山口先生の号令でした。その当時、ハンガリーは共産圏で、私は行くのは鬱陶しいと思っていたので嫌でしたが、命令一下、ついで行くことになりました。ハンガリー国内では、レンタカーで移動するという

のも、旅慣れた山口先生の考えでした。不審な車両に付け狙われ追い回され、私はどうなることか、ここで一卷の終わりかと覚悟したときも、山口先生が出て行き、拳骨でその場を去れ！とジェスチャーし、不審車両は去り、事なきを得たときは、「剛胆な先生だ：」と改めて思つたものでした。

山口先生はその後、京都府立医大からがん研病院に移り、胃癌の外科治療を専門にされています。二十年前に仙台に講演に来られ、胃癌手術、特に腹腔鏡下手術について言及されていました。その当時、腹腔鏡手術は胆嚢を取るくらいしかしていませんでしたが、「開腹手術で出来ることを腹腔鏡でしました、というのではつまらない、腹腔鏡でしか出来ないことがないか、リンパ節郭清なり、吻合なり腹腔鏡手術の利点を活かせないか、ということを考えるべきでしょう」という提言も、今では通常のことになっていて、先見

性が際立っていると今から振り返って痛感しています。

秋田大学の山口先生の後輩が急病に倒れた時、京都から真っ先に駆けつけ、心から心配する山口先生、後輩への深い愛情を感じたものでした。厳しさの中に人情、優しさ、包容力があり、多くの人を惹き付ける魅力満載で、がん研有明病院でも職員一丸となって日々を邁進されていることが目に浮かびます。



写真：昭和63年8月、カナダの国際学会に参加。
左：山口俊晴先生、右：筆者

退職にあたって

診療放射線技師長

藤田 司

一般的ですが、思い出を少々：

三十数年前の学生の頃ですが、地方のちよつとした大きめの病院に、どこそこのCT装置が設置されたと話題になり、実習先で超音波装置の実験台になり、胸部写真の撮り合いをしたりと、懐かしさがこみ上げてきます。

最初の勤め先では、撮影が怖くて出来なかつたことを思い出し、初心にかえり、責任の重さに気づいたりしている自分を見て、改めて定年なのかなと感じるこの頃です。

一人の時は、最後までこの病院にいてやると思い、転勤などきたら辞めてやると話したりして：

結婚して、子供が生まれて、転勤の話がきたときは、一緒に転勤先に行ったりと、ずいぶん変わったと自分でも思い、考えてみたら、大きいおばあちゃんが死んで、柱の一本が無くなり、結婚して一本増え、その時々で柱の数が増えたり、減ったりしている自分を見るにつけ、ずいぶんとわがままに人生を送ってきたなあと思います。

人生百年は大げさなので、少々九十年として三分の二が過ぎて、短いか長かはさておきまして、後三分の一の人生をこれから考えます。

ここに赴任して来た時に着任のあいさつ文を書いて、もう四年が過ぎようとしています。単身赴任の期間は、通算十年以上になりますが、掃除、洗濯、料理と、しなければゴミ

に埋もれる生活になるために、一生懸命にしました。

この中で食べるものに一番時間を割いたために、鍋やフライパンが、包丁などと共に増え、整理するのに時間をとられました。

あと、洗濯物を干しても、平日の日に部屋にいないので、乾かない、乾燥機があればと不覚にも贅沢に思いました。でも、カビに悩まされるよりはいいかとも、この頃は思うようになり始めました。

単身赴任の期間が長くなりますと、いろいろな事をやっていました。ゆで卵の作り方や乾麺（パスタ含む）の戻し方など：

ゆで卵などは、百円ショップで穴開け用の器具を買ってきたり、酢を入れてみたりといっぱい試しました。

パスタは水を入れたタッパで冷蔵庫の中へ一晚中入れてみたりしました。中でも、私のもっていませんが、厚い鉄製フライパンを使

「お世話になりました」

歯科技工士 崎 廣 和 文

平成八年四月一日、三十九歳五ヶ月で園に採用され、平成二十八年三月三十一日、六十七歳五ヶ月で定年退職。ジャスト二十年。

入所者の皆様、職員の皆様には、楽しい思い出をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。当時の園長先生 棟方園長から各寮の部屋は、入所者の家です。園を一つの町と考え入所者のため、仕事に励んで下さいと言われるのを覚えています。入所者の方々との交わりは、初日の楓会、盲人会への挨拶廻りから

用して、その後始末の仕方などは大変参考になりました。又、酒を飲みますので、煮物料理特に大根の茹で方で、生米を少々入れて、一緒に炊くと時間の短縮につながる事を知り、重宝しました。

ここではやっていませんが、お風呂場にビニールのテールクロスを買ってきて、シャワーカーテンにしてみました。

とりとめのないことを書き並べましたが、還暦になり体力的にも衰えを感じ始めた私をお許し下さいませ。

これから機会がありましたら、これまでの細やかな経験を少しですが、私を追い越して行く人に伝える事が出来れば幸いです。

始まりました。楓会会長の久保瑛二さん、盲人会会長亡き田中秀夫さんが私と同じ同郷でした。初めて会う方々の第一声が「北海道の出身なんだってね」でした。

もう一つ入所者の方々と近くさせてくれたのが、カラオケ発表会でした。亡き菊池琢夫さんが「新人は義務」と有無を言わずに私に唄わせた事。今では考えられない反省会でしたが、とても楽しく、ざつくばらんに打ち解けられました。私の製作した義歯で一番に出てくるのが高橋アイ子さんの亡き夫 秀夫さんの上顎部分床義歯です。秀夫さんに「目が見えなく、手が不自由だから、バネ（クラップ）が無く、舌と親指で出し入れでき、且つ落ちないで食事ができる入れ歯」と言われ製作しました。ここ二、三年ノンクラスプデンチャーとしての歯科材料が出てきましたが当時は何もありません。結果はアイ子さんに聞いて下さい。もう一つ思い出にあるのが平

成十一年三月の看護師千葉智子さんの送別会です。ほとんど女性参加の中に、男が三人参加しました。看護師の新年会には出席してしまいました。初めての参加です。女性陣の余興のすさまじさとパワーに圧倒され、男Aさんの「これ以上はカンベンして下さい」の叫びが今では耳に残っています。写真がありました。が、恥ずかしく見せられませんが、でも楽しい思い出です。入所者の皆様、御身体に気をつけ、お過ごし下さい。See Youと言いたいと言いたいところですが、さようならです。お世話になりました！



サンタさんからのプレゼント



★ ★ ★ 新生園
イルミネーション点灯式 ★ ★ ★
—平成27年12年1日—



随筆

短編集

今野きよし

A 入所者 B 看護師

A 看護師さんは、小児科の係だったのですか
B どうしてですか
A なんとなくそのように感じたものですか
B 私はそんなことはありませんよ、そう感じ
たのですか
A いつも薬飲ませて下さる時、あーんと口
を開けるのを確かめてから飲ませてくれ
ますので
B 私はね、子供さんとかお年寄りの方とか、
自分で出来ない方の係が多かったもので
すから
A そうですか、私は大いに助かります
B そうですか、そう云っていただけるとう

A うれしいです
B そうですか、私は安心しました、失礼な
こと云ったのではと後悔していましたから
A 本当のこと云って頂いて私は助かります
B 私はあまり深入りして失礼になってはと
思いつつも云ってしまいました
A そんなことないですよ、これからも気が
付いたことありましたら聞かせて下さいね
B そうですか、私も安心しました、毎日の
生活のことですから思うことがありまして
A そういうこと考えていらっしゃるのですか
B それほどではありませんけれども
A ものを書いていらっしゃるそうで気が付
くのですね

詩

佐々木 洋 一 選

◇ 入 選 ◇

《金華山参り》

北 辰 一 硯

鰯もシーズンが終り
金華山神社にお礼参りである
本船二隻運搬船二隻
それぞれ大漁旗を靡かせて
いざ出発だ
お前も一緒にあべや（一緒に行く）

父親が私に声を掛ける
内湾しか見た事がない
私にとって嬉しかった
本船は岬を曲がって、いよいよ外洋に
私の乗った運搬船も後に続く

海は広いな大きな：
子供心に実感していた
波は大きくうねり
海の色は蒼く
吸い込まれるように
深みどりである
これが太平洋なんだ
水平線はくっきりと
丸くどこまでもどこまでも
弧を描いて見渡す限り海である
父達はこの広い海で
鰯を獲っていたのだ
外洋は涯しなく大きく

世界に繋がっているのだ

牡鹿半島の先に金華山が
三角形に遠く見えて来た
女川沖に江の島が見え
人が住んでいると教えられた

右手に牡鹿半島を見ながら
船は一列に縦に並んで
一路金華山を目指して進んでゆく
船にぶつかる波が
私に問いかけるように
大きくなったら

一人前の漁師になるんだと
声を掛けているようだ

船はどんどん進み金華山が
大きく目に入って来た
金華山瀬戸に入ると
牡鹿半島と金華山が幅一K

聳えるようにのしかかって来る
白いお尻をした鹿が遊んでいる
磯辺には猿が海草を取って
食べていると教えられた

防波堤のような岸壁に着き
いよいよ上陸である
急勾配な坂道が続いている
猿も鹿も道端に集まって来る
餌を貰うのを待っているとの事だ
初めて見る私には怖かった

中腹にある金華山神社に着き
廻廊を渡って本殿に通されて
夢を見ているような錯覚にかられる
その豪華絢爛さに圧倒される
鎮守の森のお社とは格が違う
本殿に額かみかみずき一同お破やぶいを受け
大漁のお礼と家内安全
海上安全大漁祈願を：

神主の祝詞のりとの莊嚴そうごんさに
うっとりしていた

やがてお膳が運ばれ
子供の私にもお膳が出され
父と一緒に並んで
大人になったような
気分になっていた
宴もそろそろ終り
帰りの船路は金華山を拝し
十一歳の私はひと回りも
ふた回りも大きくなってゆくのを
父は私の将来を楽しみに
見つめていた事だろう

【選評】

《金華山参り》

北辰一硯

漁師の父と初めて金華山へ出かけた時の高鳴る
気持ちや、大人に足を踏み入れた作者の心の動き
が見えてくるようだ。父との無言の愛も感じる。
むかしを思い出し描いたのだが、未来への力が
漲っている作品でもある。

◇ 佳 作 ◇

《年末の月と星》 今野 きよし

夜明けが近い
朝の五時
ベランダの

真上に煌々
月が輝いて
月の形を
よく見ると
半分欠けた
月だった

気温は零度
風はつめたく
長い時間は
見られない
月の明るさ
眼の奥に
刻んで部屋に
引き返す

ややすぎて
月を眺めに

ベランダに
かすかに光る
無数の星に
印象書こうと
ペンを執る

うまい表現
できなくて
見れば見るほど
奥行深い
うす雲かかる
月走る
雲はどっしり
動かない
西を目ざして
月は走り行く

短歌

長田雅道選

◇ 入選 ◇

北辰 一 硯
黒い袋野積みにされて異様なる指定廃棄物の哀れなる姿よ

【選評】 福島原発事故は記憶に鮮しい。

いやわれわれ日本人にとって永遠の課題であろう。放射能に汚染された指定廃棄物と呼ばれる物体。黒々と積まれた様はまさに異様であり、それを哀れなる姿よとの確

に表現したのがいい。

今野 きよし

背もたれの椅子に腰かけ思いおり草取る亡母の丸い背中を

【選評】 午後、だろうか、夕方だろうか。

椅子にゆったり腰かけて憩いながら、思いにふける。いつしか亡き母の面影が浮かぶ。草取る丸い背中とはつきり表現しているのがいい。あるいはその時の母の齢に近づいている作者なのであろうか。

◇ 佳作 ◇

北辰 一 硯
指定廃棄物未だ決まらず二年経つ知事は
国への怒り現わに
朝夕の寒さ身に沁む老の身は神経痛にも
耐えつつ生きん
わが寮のすぐ前で工事始まりぬ音の公害
午後六時まで
家が建つまであと二年待たねばと仮住まいの弟の話

今野 きよし

テント張り客を迎える準備せし園穩やかにパネル展の日
日に映る満天星紅葉眺めつつ義歯をはずして具合を見入る
今晚は当直ですから宜しくと部屋毎まわる看護師の声

久々に訪ねし句友ににこと椅子をすすめて吾を迎えり
補聴器の点検終えて物音の大きく聞こえ忙しくなりぬ



俳句

山田桃晃選

◇ 入 選 ◇

百才の婆さんぷつぷつ初日の出
今野 きよし

【選 評】

百歳のお婆さんは元気そのもの。
嬰かくやく鑠と背を伸ばして初日の出に手を合わせ祈る姿が見えてくる。人生よ、これから益々のご健勝を祈る。

何事もなくて幸せ日向ぼこ
園 永 泊

【選 評】

「何事もなくて」には色々の悩みがあり、哀しい事寂しい事又は楽しい事もある。幸せとは生きる喜びであり、人生の至福のひとつきが日向ぼこである。

この旅を最後と思う冬紅葉
今野 きよし

【選 評】

旅の最後、いや始まりでしょう。冬紅葉のように色彩を何度も替えて旅をする喜び。若さを呼び戻す力こそ、この旅である。

◇ 佳 作 ◇

今野 きよし
讚美歌の調べなめらかクリスマス
やさしさの籠りし会話竹の春
文添えて早く食えよと風りんご
嬰兒の写真離さずふところ手

園 永 泊

実り田にえくぼを描く風そよと
シューマンの曲を奏でるスイッチョン
ドレミファの色で分けられミニトマト
夜が明けて露にそれぞれ憂いあり

川 柳

雫石隆子選

◇ 入 選 ◇

《人位》
孫抱いてからの言葉がやわらかい
桜山南 仙

【選 評】

子育てのように責任から解放されて、我が子よりも可愛いと言われる孫。自らのDNAの後継者でもあり、なんとも愛しい存在である。限りある命の日に、しっかりと祖父の印象を残した。

《地位》
大掃除心のすすも払いましょう

【選 評】 一年分の汚れを払う大掃除。か
たちある物だけでなく、一年分の
ストレスも払いたい。大掃除は、
わたしの一年間を省みる機会にも
なったようである。

◇ 佳 作 ◇

桜山南仙

元旦やベッドの合掌許される
人の世は笑い顔にも不満あり

今野 きよし

重い足引きずりながら来ましたよ
おかげさまのれんの効果現れて

桃 生 小富士

わが仕草今日もコケシに見つめられ
一人部屋話し相手はコケシだけ

長 沼 蓮 花

お土産のくまもん部屋の主となり
復興の海へ合掌初日の出

《天位》

故郷で正月迎え羨まれ

桃 生 小富士

【選 評】 故郷で正月、思っ
ただけでも温かく懐かしい。お正
月を故郷で送った作者、まさに羨
望の的であろう。新年早々に訪れ
た至福の時間。

あしあとを振り返り

看護師 渡 邊 一 子

春、これまで先輩方を送り、そして後輩を
迎えてきた長い年月は、「出会い」と「別れ」
がありました。自分の定年なんてまだ先の事
と、気にも留めずにいきましたが、ここ二、三
年前から、定年を意識し始めました。あと何ヶ
月、あと何日だと指折り数えていた先輩方の
姿が、今の自分に、そのままそっくり振りか
かっている自分が寂しく感じます。

思い起こせば、昭和五十四年九月、車は砂
利道の細い一本道をガタゴト揺られながら、

面接会場である新生園へ向かっている。道の
途中から民家が途切れ、うっそうと生い茂る
林の中を進みながら、道を間違えたのではと、
不安が募るばかりでした。戻るわけにはいか
ず、進んで間もなく一軒、二軒と民家が見え
初めた時、ホットしながら、長い道のりのよ
うに感じました。

面接の待ち時間、何をどのように聞かれる
のか、考えただけでも緊張でした。いよいよ
私の番になり、人一倍あがり症の私は、面接
中も緊張の連続でした。当時の園長（故横田
篤三先生）から、「らい病は子供に移ると思
いますか？」と質問され、よく分からないま
ま「いいえ」と答えました。そのあと、横田
園長は詳しく教えて下さいましたが、正直よ
く覚えていないのです。面接者は他に五、六
人はいたのかもしれませんが、その時の様子
はうろ覚えでしかありませんでした。こうし
て面接と言う大イベントを経験し、長い一日

が終わりました。

採用の連絡から一ヶ月程経った頃、産休代替として働き始めたのです。外科勤務を命ぜられ、見学したものの、見かけない光景に戸惑いました。入所者は長い処置台にそれぞれ手や足を出し、看護師は向かい合わせになり処置をし、見たことのない傷（後で足底穿孔症と解り）や皮切り（肥厚ベンチ切除）など、次々と人が入れ替わり、混みあっていました。先輩はこうでああでと処置をしながら教えてくれましたが、「あとは見て覚えること」と言われ必死でした。なにせクーパーや攝子に触るのは、実習以来のことで戸惑うばかりでした。治療棟の全体が何となく解ってきた頃、産休代替は終えました。先輩からは、一度「顔」を出しておけば、また優先的に声が掛かるから辛抱してと、励まされました。

それから三か月経った頃、今度は病休代替として病棟に配置、何もかもが初めてのこ

ばかり、先輩の後を追いかけ、覚えるのに必死でした。とにかくコールが鳴れば、先輩より先に行くのが当たり前でした。夜勤の経験はなく、普段寝ている時間帯に起きて働くというとても辛いことなのに、先輩は「慣れるしかない」と、いとも簡単に話すのでした。病棟で働き始めて三、四か月経った頃、病気療養中だった先輩は、職場復帰をすることなく旅立ってしまいました。病休代替だった私は、復帰を願っていただけに、何とも言えない気持ちになりました。短期間ではありましたが、何もわからない私に教えて頂き、ハキハキとした性格が好きでした。通勤途中、その先輩の実家の近くを通る度、あの頃の姿を思い出します。

二回目の代替を終えその後、賃金職員を三年程、そして定員職員となりました。定員になると、決まって不自由者棟勤務を命ぜられ、昭和五十八年、泉センター勤務（泉寮・寿寮）

となり看護師一人勤務、師長は二つのセンターを兼務し、処置は二人で行いました。居室は満室状態で、全盲の方は十人近くおりましたが、誘導や生活支援はほとんど自立出来ていることに、ただ驚くばかりでした。

翌年の昭和五十九年六月二十八日、「貞明皇后をしのぶ在園者慰問激励の会」に高松宮同妃両殿下御成りになり、居室のガラス越しから、お姿を少しだけお見受けしました。その記念樹として、紅梅、白梅の対が植樹され、毎年梅の花が咲く度に、この先老木になっても咲き続けてほしいと願うばかりです。

就職当時、入所者数は四百三十人程と記憶していますが、職員と入所者の名前を覚えるのだけでも大変なことでした。一人、また一人と名前を覚え言葉を交わすようになると、「お家はどこか」「どこの学校（看護）を出たのか」と聞かれる入所者の方がありました。当時は園内に看護学校があり、学院生の実習で

交流があったからかもしれません。外科で処置をしながら、話題に花が咲くこともあれば、ちよつとした手違いや、言葉の綾で、場の雰囲気が変わることもありました。外科では午後、衛生材料作りなどに追われ作業していたある日の午後の事、突然入所者の〇〇さんが来て（処置業務は午前）、力の入った口調で何かを言っているようでした。先輩は最初、それをただ黙って聞いており、私は解らないまま、ただその様子を見ているだけでした。先輩は「〇〇さん、解ったから、この位いいでしょう、言っておくから」と宥めていました。〇〇さんが帰ったあと、どうやら私に問題があったようだとのことでした。午前の処置では直接の関わりはありませんでしたが、私が処置をしている時、隣りの人とのやり取り中、どうも私に何かを教えようとしたようです。無視したわけではなかったが、勘違いをさせてしまい、〇〇さんは、その場で

言わず、入所者がいない午後、外科に来たと
言うことでした。先輩からは、「ああいう時は、
先ず話をよく聞く、違うと思っても口にはせ
ず、先ず誤っておくこと、時が経ち相手が間
違いだと解れば後で誤ってくることもある。」
と教えてくれました。自分の思いを言葉にし
まいがちだが、口は禍の元とはよく言ったも
の、余計なことは言わず、気を付けなければ
と深く反省しました。人の数だけ、見る目、
見られる目はあるんだなあと感じました。

楽しいこともありました。職・患大運動会職
員・元患者）では、一日がかりで行ったいろ
んな種目に、入所者も職員も景品ほしさに参
加し、職場で待機している職員にも分配しま
した。しかし、年々入所者の参加率が落ち、
一人でも参加できるよう種目の工夫で、新し
く車いす競技を設け、入所者の車いすを職員
が歩く速さで押し、一チーム四、五人で競争
しました。車いすの方が多くなってきた時期

い程度に抑え、あとの二人にお任せでしたが、
作ってみないかと言われやつと一句、「先輩
へ憧れ抱く看護像」、理想的な先輩をお手本
に作り、また自分もそうなれたらいいなあと
思ったからです。「句」のことを知るきつか
けにもなったことで、しんせい誌を読むよう
になりました。

これまで、多くの先輩にお世話になりました
が、自分の後から続く後輩が段々多くなる
につれ自分の姿に自負出来ない心境はいつも
ありました。新生園に入ってから、先輩から
は、定年まで辞めずに勤めることを、いつも
聞かされながら、何とか周りのスタッフに助
けられ、この時期を迎えることができました。
感謝申し上げます。

本当にありがとうございます。そしてお
世話になりました。楓会会長を初め入所者皆
様、職員の皆様、どうぞお体を大切になさっ
てください。

で、運動会も午前中で終了となりました。テ
ント内で応援している人も、その場で玉入れ
ができるよう大きな箱を用意した結果、まと
めて手に持ち、そのまま箱にごそつと入れる
方もいました。職員も笑い盛りの上がった
ようです。職員の仮装行列、浴衣を来た職
員の盆踊りはグラウンドいっぱい色とりどりの
の花が咲いたような輪が見事でした。私は、
人からがに股だと言われますが、自覚があり
ません。この日ばかりは普段と違い、内股を
意識し、下駄の鼻緒の痛さも我慢できました。
山鳩センター（山鳩寮・明峰寮・西明峰寮）
勤務の時、全盲・弱視の方三人程で一部屋に
集まり、「句会」をしていました。しんせい
誌に載せるため、自分が作った句をそれぞれ
お披露目しているようでした。私たち看護師
三人も聞きながら関わっていくうちに、何と
なく句を作る羽目になり、評価を頂いたもの
です。私は全然解らず、ちよつとのお付き合

思 い 出

准看護師 相馬京子

時の経つのは早いもので、今年の春で退職
になります。

皆々様、長い間お世話になりました。
定年退職という言葉は、ずーっと先の事と
して働いていましたが、二年前頃から、意識
するようになり、その頃から後二年、後一年
と数えて、もう残すところ二ヶ月を切ってし
まいました。

思い起こせば、今から三十年前（随分と古
い話になりますが）昭和六十年四月一日付
で採用（当時は賃金職員として二年間）にな
り、昭和六十二年四月一日付で定員となりま

した。

入職時は、ハンセンの事は、殆ど無に等しいくらい知りませんでした。その日から色々勉強させて頂きました。最初の勤務場所は外科で、先ず入所者の方々の名前と顔を覚えるのが大変だったことを思い出します。(入所者の方々もたくさんおりましたし…でも、まあ…当時は若かったので、今よりは短期間で覚えられました…)次は処置の習得です。他のナースの皆さんが「皮を切ってくれ」(ベンチ切除)と言われて、

クーパーで切っているのを見て驚きました。私の中で、クーパーは先生(医師)が使うものとの固定観念があったものですから…血を出さずに切る?痛みはないの?皮を切って大丈夫なの?と?マークが何個も頭の中で浮かびました。知らないという事は、何と愚かなものでしょう!そんな新人の私に、処置時のベンチ切除は出来るはずありません。ベン

た頃に?病棟三人夜勤が二人夜勤に戻ったと記憶しています(間違っていたら、すみません)。現在第一メープルケアセンターで勤務しておりますが、入所者の皆様も高齢となり、何かと看護、介護が多くなってきました。そんな訳で、早急にワンフロア毎の夜勤が理想と感じております。

又、以前は数々の行事もあり、参加させて頂きました。職患運動会、春・秋の不自由者旅行、ゲートボール大会、カラオケ発表会、合同散歩、芋煮会等々、その行事等には、必ずと言って良いくらい、新採用職員、転勤されてきた職員は、暗黙の了解の如く出演や参加を促されました。その時々、楽しかったり、ちょっと辛かったりした事もありますが、今となれば良い思い出です。

そして、この原稿依頼も退職時の暗黙の了解の一つでしょうか…私は、文章を書く事が大の苦手(苦手なものは他にも沢山あります

手切除してもらいたい方は、自分の順番を次の人に譲って、私に当たらないように、調整させて頂きました。(すみません、気を遣わせて??)でも、何時までも避けている訳にもいかず、先輩のスタッフの中には、「見ているだけでは、覚えないよ。実際にやってみた方がいいよ」と声を掛けてもらい、又入所者の方には「はさみ(クーパー)で切った傷は直ぐ治るから切ってみろ」と自分から進んで切らせて頂く事になり、ベンチ切除のデビューを果たし、その後も回を重ね、お陰様で上手になり(自分だけが思っている事かも?)今日に至っています、有難うございました。

当時、勤務交替は三ヶ月交替が多く、覚えた頃に交替という体制でしたが、時が経つにつれ、六ヶ月、一年、二年と徐々に長くなり現在に至っています。夜勤も病棟のみで行われており、二人夜勤から三人夜勤となり、不自由者棟での(夜間センター)夜勤が始まっ

が、(特に)ですが、依頼された以上は果たさなければならぬと思ひ、意気込んで書き始めたものの、思いつきのまま書いたものから、何とも取り止めのない文章になってしまいました。(やはり、私には無謀でした…)これまで学んだ事は、これからの私の生き方に必ずプラスになると確信しております。

先日、主人に「今迄三十年働いてきたが、具合悪いと言って、休んだ事なく良く務めたなあー」、「感心する」と言われました。

長い間、健康で楽しく定年まで働けたのも、皆様の優しさと家族のおかげと感謝しております。

入所者の皆様、これからもお身体を大切に、元気で一日も長く楽しく、お過ごし下さい。大変お世話になりました。

有難うございました。

思い出 そして感謝

准看護師 窪田 澄子

この度、原稿依頼され正直淋しい気持ちになりました。私は昭和六十一年五月に入職致しました。当時三五〇人近い入所者様がおられ、四季折々の行事があり、園全体が活気に満ちあふれておりました。さつき展、職患大運動会、文化祭、野菜品評会、カラオケ発表会等々、さつき展では近隣の人達がいい物を求めて来たり、野菜品評会に出品された野菜はとてつもなく素晴らしく、感心していました。出品された野菜はある福祉施設に提供されていたと聞いております。スポーツ好きな

保護や固定するという意味の他、一つの美的感覚も求められた感じさえあり、本当に難しく感じられました。

当時の治療棟は入所者様の交流の場でもあったのではないかと思います。又、昼休み時間に園内を知る為、自転車で廻って歩いた事もありました。保健科訪問で、一般寮を歩いている時、畑で野菜の手入れをしている方から見事なカリフラワーを頂き帰って来た事もあり、とても甘みのある野菜でした。センター勤務をして、治療棟とは違い色々な話が出来る、桜の季節に入所者様と話し合い、庭にビニールシートを敷き、お花見をし、歌ったり、食べたり、楽しいお酒を飲まれた方もおられました。思えば本当に懐かしく色々思い出されます。

そして私事、健康のかたまりと思っていたのですが、長い療養を余儀なくされた私の病床に、励ましの手紙やら、遠いところお見舞いに来て下さった入所者様、スタッフの皆様

私にとって運動会はとても楽しく、センター毎の応援合戦、対抗リレー、マラソン、職員による仮装行列、浴衣を着て盆踊り等入所者様と一緒にプレー出来た事がとても心に残っております。

更に、県内国立病院スポーツ大会があり、野球、ソフトボール、バレーボールの試合があり、私はバレーボール部に所属しております。大会に入所者様が応援に来て下さり、私達のやる気モードにスイッチが入り、優勝した事もありました。ある入所者様が、「昔バレーしている窪田さんの姿を思い出すね」と話しをして下さり、恥ずかしいやら、嬉しい気持ちになり、楽しい思い出がいっぱいです。又、入職して治療棟に配属され、全科を廻り、勉強、主に外科勤務で、手術の件数も多く、眼科、耳鼻科内視鏡術も当園です。全くとって、もの凄く大変で機械磨きしながら、手術器具の名前を覚えたものでした。又、包帯を巻くのにも

に励まされ、再び白衣を着る事ができ、仕事の出来る喜び、楽しさ、幸せを実感致しました。その時の気持ちは決して忘れる事は出来ません。

そして今日を迎える事が出来た事は、皆様の優しさと、家族の支えがあり、今日を迎える事が出来たと思っております。

入所者の皆様、これからもお身体を大切に、療養して下さいよう心よりお祈り申し上げます。大変有難うございました。



ふり返つて

介護長 川田 良子

おかげ様で、この三月に定年退職を迎えようとしています。

昭和五十四年十一月二日付で福祉室管理の包帯再生に採用されました。作業返還の時期で、最初は入所者の方々と共に洗濯場の隣にあった再生場で、十数人でガーゼや包帯の仕事と一緒にしました。いつも笑いのたえないにぎやかな職場でした。

当時は木造の建物が多く、本館、福祉室、楓会と全てが古く、今とは格段の差でした。

入所者の皆さんもお元気で、畑仕事、売店、

床屋、パーマ屋と忙しく働いていました。

春には桜通りの桜の花のトンネルがとても綺麗で、夏には睦ヶ池の蓮の花、秋には紅葉が素晴らしく、冬には渡り鳥が訪れ四季折々の彩りを楽しませて頂きました。

平成三年より介護員として不自由者棟に配置換えになりました。慣れない業務で戸惑ったり、失敗したりの毎日でしたが、皆さんに助けて頂き、又ご迷惑をかけながら、ただただ夢中で働いた事を思い出されます。

春には入所者の皆さんと一緒に桜の花を見ながらの散歩、春と秋のバス旅行、夏の花火大会、冬のお楽しみ会、入所者の皆さんには楽しい思い出を沢山頂き、ありがとうございました。

長い間、健康で楽しく定年まで働けたのも、皆様の優しさのお陰と感謝しております。

これからは畑仕事？孫達のアッシー（送り迎え）等をして過ごしたいと思います。

本当にありがとうございます。

あの頃のパワーを

介護長 高橋 秀子

私が新生園に採用になったのは今から三十六年前の昭和五十五年の事です。

その当時の入所者の皆様の平均年齢は六十歳と古い新生誌で知り、今の私と同じだったことに、当たり前ではありませんがびっくりしました。入所者数も四百二十九名と今の六倍、当時の園内に活気があったのも納得です。そして、また行事も盛んに行われていました。

お正月の園内年賀状のお年玉抽選会やトランプ、将棋等の大会に始まり、春は観桜会、提灯をつるした桜通りや睦ヶ池の周りには園

外からもお花見に来られ、夜桜まで賑やかでした。夏は盆行事です。魚釣り大会やミニゴルフ大会、ゲートボール大会もありました。秋は行事も多く、運動会に始まって、入所者の皆様の作品を展示した文化祭や野菜品評会、その他に旅行や職患のソフトボール大会、ゲートボール大会等々盛りだくさんでした。

その中で特に思い出に残っているのは、やはり運動会です。当日は朝から職員もどこかうきうきしていました。万国旗の空の下、園歌を合唱し、ラジオ体操で調子を整え、さっそく競技開始。定員を超えると競技に参加出来なかつたので、みんなこぞつて駆け足で競技の列に並びます。「よいいドン」のピストル音で、競技数も十種類以上あったように思います。どの競技も、それはもう大変。勝つために必死です。一つの競技が終わるとまた駆け足で次の競技に並びます。運動会は一日がかりでした。お昼を会場で食べる方もいて、休憩時間も賑やかでした。

最終競技の綱引きでは、綱を手にする、引く前から力が入り表情も変わります。これ以上力が出ないという位必死で綱を引き、次の日大丈夫だろうかと思うくらいでした。

最後は勝っても負けても、力を出し切った感があり、疲れもありましたが爽やかな気持ちになりました。皆様も「面白かったなあ」と笑顔で退場していかれました。

そして思うのは、私と同じ年齢だったあの頃の皆様があれだけの行事をこなし、そしてとことん楽しめたあのパワーはどこからきたのだろう…。と。何事にも一生懸命取り組み、やるからには力を出し切って最高のものにするという気持ちがあるの行事にもあり、だからパワーを出せし、楽しめたのだと思います。

私のこれからの人生、あの頃の皆様の前向きな気持ちを見習い、私なりのパワーが出さるよう一生懸命に、そして楽しく過ごしていきたいと思えます。

い（履歴書）」と声を掛けられ、六月に賃金職員の看護助手として採用して頂き、福祉室勤務を命じられました。福祉室での仕事は、事務内外の雑用と一般寮へは（郵便物と薬）、不自由者棟には（郵便物）の配達で、お天気の日には自転車、雨、雪の日には歩いて配達し、濡らさないようにと気を遣い、大変だった事もありましたが、一般寮の方々と話し「ご苦労さん」と声を掛けられると心が和み、又、人生の先輩方に、色々と、教えて頂いた事を思い出します。

平成に入り（三年）足の手術をしたので、縫製の職場に代わる事になり、家庭科の授業以外、縫い物には縁遠かった私が、丹前下、ズボンの裾上、袖詰め、色々な補修理を先輩に教えて頂き、仕上げる事が出来、喜んで頂いた事が懐かしく思い出されます。

平成十四年の三月、福祉室長さんから、来月から中央集会所で仕事をして欲しいとの話がありました。集会所は、接待業務で、楓会を通して依頼される仕事、まして一人での

三十六年間、様々な経験と勉強をさせて頂き、本当にありがとうございます。お世話になりました。

振り返って思う今

看護助手 佐 佐 恵 子

三月に退職を迎える事になりました。

私は昭和六十一年三月に病休代替で「栗駒、楓」といふ、松風、北斗」の木造平屋の建物が建つ寮に一番初めに勤務させて頂きました。

右も左もわからない私は、入所者の名前と顔を覚えること、皆さんに迷惑を掛けないように先輩方に教えを請う毎日でした。

師長さんから「募集しているから出しな

事、思いもよらない配置換えに戸惑いと不安でいっぱいでした。入所者のMさんに挨拶をする、接待は「おもてなし」、お茶を出すのは「熱からず温からず」な、宜しくと言われる緊張した事を思い出されます。

平成十八年四月には、不自由者棟に配置換えになり、高砂寮で勤務、今の第二メープルケアセンターが建つ前の寮で夫婦寮でした。その後各センターを回りましたが、病棟勤務をした時は、高齢化のせいもあるとは思いましたが、大勢の方々との悲しい別れがあった事、心が痛みました。

縁あって新生園で働かせて頂き、色々な仕事をし、身に付けた事は忘れられません、入所者の皆様からは沢山の思い出、スタツフの皆さんからの教え、支えて頂いた事、心から感謝の気持ちでいっぱいです。

入所者の皆様が一日でも多く穏やかな日々を送る事、願っております。本当にお世話になりました、ありがとうございます。

元介護員の立ち話

今野 きよし

A 元介護員 B 元介護員

A あーら、あんだしばらくぶりだごと
 B あんだごそごまで行って来たのしや
 A 何、おれのごとだもの、そこらぶらぶら
 B して歩いて来すた
 A 良かったね元気で歩いて来られて
 B それほどでねえげんとも
 A なんだか今日はいつもと違う様子だね
 B 何、おれはいつも変わりありえん
 A なんとなく様子違うような気がするね
 B そうすか、そんなに違うのすか、なんぼ
 A 隠すてもすぐわかられるなあ

A B ほんでがすべ、なんとなく違っていたもの
 B 今日ほね、新生園の敬老の集いというの
 A があってね、民謡聞いて来すた
 B なんじよなことやるのしや、敬老の集い
 A ていうのを聞かせてけえん
 B 今まではね、園内の敬老会という催しを
 A やっていたのしや、町だの村でやるよう
 B なこと二、三年前から違う催しをやるよ
 A うになったんだと
 B そうすか
 A それで今度は歌手の方を呼んで職員の方
 B や近くの方々とか皆さんに楽しんで貰う
 A ようになったと云ってました

A B 前がらのこと変えたのすか
 A 元職員の方や近くの人達も一緒になつて
 B 歌を聞くこと出来るようになったと云つ
 A てました
 B はは、そういうことになったのすか
 A その話を聞いたから、おれも歌聞かせて
 B 貰うかと思つて行って来たのしや
 A あんだまた、おれ達より耳早いこと
 B そんなことないのしや、たまたま家の母
 A ちゃんも今勤めて居るから話聞くごと出
 B 来たのしや
 A そういうことすか、ほんでわかりすた
 B それで行つて歌を聞いて帰り道だったの
 A しや
 B ははん、ほんだから弾むように帰つて来
 A たのすか、なんとなくそのように見えた
 B からね
 A 今日ほ民謡歌手の有名な方なんだそうす
 B その方向と云う方なのしや名前聞かせて
 A けえん、あんまり勿体ぶらないで聞か

A B せてけえん
 B ほんだつて語つてええんだかなんだか
 A あんだあんまり詳しいからあんだ決めた
 B と思つてね
 A あんだらば、おれのところひつて（から
 B かつて）相変わらずだね
 A 今ほ誰もひづる人居ないもの、母ちゃん
 B （息子の嫁）さ、そんなこと云われな
 A い孫もそうだし
 B そうすか、ほんであんだも肩身せまいの
 A すか
 B ほんでがす、今はそっちに気使いこつち
 A に気使いすてんでがす
 B そうすか、あんだもそんなに変わったの
 A すか
 B ほでがすと、ところで今日の歌どうです
 A 今日ほ良かったね腹抱えて笑います、あ
 B んださも半分分けてやりたいけれどま
 A とめて話するのむづかしくてね
 B それではこの次だね

A 今日は何午後一時四十分から始まって一時間きっちりうまいもんだね
B それではやっぱりプロの歌手だね
A 始めはね挨拶からはじめて、去年は体の具合が悪くて来られなかった話からトクと云うそうですがなかなかうまいもんだね
B 皆さん引き付けるのすか
A そうして気持ちを引き付けて盛り上がつたところで歌を歌うんだね、恵子のオリジナルと云って歌ったのしや
B オリジナルて何のごとどかわかねけんとも、とにかくええんだね
A ほんでがす、とにかくおもしろくておかしくていつのまにか引き付けられて行くんだね
B あんだも引き付けられたのすか
A ほんでがす、おれはすぐその気になつたらね
B ほんでいつも楽しく笑ってばかり居るの

A すか
B ほんだちやね、そういうことになるね
A そんなごええね、いつも楽しく笑ってばかり居るのすか
B そんなごえないのしや、たまたまその場さ当たったからね
A それから何あつたのしや
B ずいぶんあつたけれども、笑つてあつはつはて一時間過ぎしてしまつたね
A 一時間も笑つてばかり居たのすか
B ほんでがす、歌の後の方さ、なんだりかんだりと付けて笑わされてね一時間過ぎしたのしや
B へえ、一時間もあつはつはなんだりかんだりて歌って居たのすか
A そういうことになつたのしや、後で考えてみると、もう少し歌の題名覚えて来るとえがったのになあと思ひます
B そうだやね、まとめて話をするのなかなか難しくてね

A ほんだね
B ほんで今夜家さ帰つたら皆さんに歌つて聞かせたらええでないのすか
A なんて歌つたらええかね
B あんだ家の母ちゃん（お嫁さん）も歌聞いたべからえがすちやや
A おらの母ちゃん今日は留守番だから歌聞かれないて居たからね
B 歌聞かれないても歌聞いた人から話は聞くべからね
A ほんだちやね、聞いて来るかもしれないね
B ほんだがらあんだが話してみらえん
A ほんだほんだ、気持ち楽になつた
B そうするとね、今度からお嫁さんが休みの日には、お母さん一緒に行かねがすかと外出誘われるかも知れないね小遣いかかるかも知れないけれども
A ああ、ええこと聞かせられた
B えがったのすか、余計なこと云つたような気すて

A ところで、あんだ勤めて居た時みんなを笑わせたり、相談に乗つたり、気配りしてくれて良かったね、先輩を立てて新しい人の面倒を見てくれて助かりました
B おれほんなことすたのすか、何も当たり前のことやっていたただけなもの、気付かなかつた、今あんだに云われてそうかなと思つた
A そこがあんだのええところなんだ、気持ちの奥深いところね
B ああ、良いところで家さ帰つかね
A ほんだね、先ずはさようならすつかね
B 私もさようなら、ありがとうござりすた
A 私も同じです、さようなら

「第44回医療功労賞」受賞

元副園長 森 芳 正 先生

長年にわたり地域医療に
貢献した医療関係者に贈られる
「第44回 医療功労賞」
を受賞されました



宮城県登米市の国立療養所東北新生園で、17年間診療にあたり、がんで亡くなる入所者が多かったことから、内視鏡と超音波を使った検診を行って早期発見を図り、がんによる死亡者を減らした。1993年、石巻に診療所開業に伴って新生園を退職。その後も、新生園入所者と地域住民の交流にご尽力いただき、森先生が企画して下さる新生園花火大会も17回を数えた。

